



てんぐやひさきち 天狗屋久吉 (初代天狗久)

天狗屋久吉(初代天狗久)は、阿波木偶でこの名作を数多く残した人形師です。本名を吉岡久吉と言ひ、安政5(1858)年5月21日に現在の徳島市国府町で生まれました。明治6(1873)年に16歳で人形師若松屋富五郎わかまつやとみごろう(人形富)に弟子入りをし、10年間の修行を経て26歳の頃に独立、「天狗屋」という屋号を名乗ります。

天狗久は時代の流れに合わせた人形制作をし、新たな技法を確立しました。徳島の村々で、幕末期に農村舞台による屋外での人形浄瑠璃が多くなると、その影響で人形を大きく動かすようになり、大型の頭かしらの注文が来るようになりました。そこで、天狗久は四寸二分(約12cm)が主流だった頭の大きさを、従来の檜材から桐材に変更し軽量化することで、六寸(約18cm)まで大型化することに成功しました。



天狗屋久吉

さらに、明治時代に入り写実的な人形が好まれるようになると、従来の木製目玉ではなくガラス眼を採用することで、より写実的な人形へと近づけていきました。



明治40年ごろの天狗屋と天狗久



JAPAN HERITAGE
日本遺産

天狗久が最も精力的に人形制作に取り組んだのは、明治 20(1887)年から明治 30(1897)年頃で、この頃の徳島は阿波藍製造の全盛期でもありました。明治 22(1889)年当時の徳島市の人口は約6万人と全国 10 位の大都市であり、藍の製造と販売は徳島の経済力を支えていました。そして、これにより富を得た藍商人は地域の文化、芸能にも多額の投資をし、大衆娯楽としての人形浄瑠璃もまた全盛を迎えていました。

しかし、明治 30 年代後半になるとドイツからの化学染料の輸入によって藍産業は大きな打撃を受けます。さらに、明治時代末に「浪速節」が空前の人気を博し、大正期に活動写真やトーキー映画が出現したことで娯楽が多様化し、人形浄瑠璃の人氣に陰りが見え始めました。

それでも天狗久は人形づくりをやめることはなく、生涯に製作した人形頭は千点を超えるとされています。天狗久の作品は全国各地に残っているほか、米ハーバード大学からの依頼を受けた制作や、宮家への人形の献上など活躍は多岐にわたります。

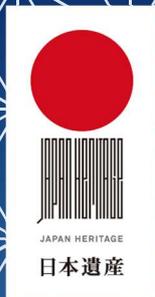
天狗久は、昭和 18(1943)年 12 月 20 日に 86 歳で没し、70 年間に及ぶ人形制作を終えました。天狗久が制作した頭や、人形制作に使用した道具類、工房などは国や県の文化財に指定されており、その歴史や技術、芸術的価値が高く評価されています。



細工座の天狗久



国重要有形民俗文化財 阿波人形師の製作用具及製品



(年齢はすべて数え年)

年代	年齢	おもな出来事
1858(安政5)	1	5月21日、名東郡中村(現徳島市国府町中)の笠井岩吉の三男として生まれる
1862(文久2)	5	母清と死別
1868(慶応4, 明治元)	11	明治維新が起こる
1873(明治6)	16	名東郡和田(現徳島市国府町和田)の人形師若松屋富五郎に弟子入りをする
1883(明治16)	26	和田の吉岡宇太郎の養子となり、その長女リヤウと結婚。天狗屋と称し独立する
1884(明治17)	27	長女シゲリが生まれる
1889(明治22)	32	徳島市制が施行され、徳島市の人口が全国第10位(約6万人)となる
1892(明治25)ごろ	35	人形にガラス眼を採用しはじめる
1894(明治27)	37	日清戦争が起こる 人形頭が大型化しはじめる
1903(明治36)	46	黒田要(二代目天狗久)が養子となり、長女シゲリと結婚する
1904(明治37)	47	日露戦争が起こる
1907(明治40)	50	「世界第一」と書いた看板を掲げる
1911(明治44)	54	要の二男治(三代目天狗久)が生まれる
1914(大正3)	57	第一次世界大戦が起こる
1915(大正4)	58	要が死去
1923(大正12)	66	関東大震災が起こる
1930(昭和5)	73	梨本宮殿下に「楠正成」の頭を献上
1934(昭和9)	77	妻リヤウが死去
1936(昭和11)	79	米ハーバード大学から「鬼面」と「美しい女の顔」の注文がくる
1938(昭和13)	81	東伏見総裁宮に「静御前」の頭を献上
1941(昭和16)	84	文化映画「阿波の木偶」撮影
1943(昭和18)	86	12月20日、天狗久没する

天狗久略歴年表



天狗久旧工房(現天狗久資料館)